

私立大学研究ブランディング事業

29年度の進捗状況

学校法人番号	041002	学校法人名	東北学院		
大学名	東北学院大学				
事業名	東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業				
申請タイプ	タイプA	支援期間	5年	収容定員	10,074人
参画組織	ヨーロッパ文化総合研究所、キリスト教文化研究所、東北学院史資料センター、東北文化研究所				
事業概要	<p>震災という未曾有の物質文化の破壊を経験した東北において、本学内にあるキリスト教中世的文化財を軸に、時代と地域による人間中心の人文学(人間学)研究に併せて、中世にさかのぼる神中心の神学に基礎を置く総合的な神学と人文学の研究拠点を確立する。受肉を根拠に物質文化を肯定する神学を土台として、キリスト教によって地域を人的知的に支える大学という本学が目指している大学像を可視化し、更に強固なものとする。</p>				
①事業目的	<p>本学に関連する文化財を神学・人文学の見地から研究することによって、キリスト教物質文化の基礎が神学にあることを確認し、「東北における神学・人文学の研究拠点」を整備構築することが、本事業の目的である。</p> <p>本研究は本学の文化財の調査研究をきっかけに、神学を人文学の基礎として位置付け、物質文化を再考するとともに、東北の地域性を、ポスト・モダンの価値をもつ文化資源と考える。すなわち神学と人文学の総合的観点から物質文化を支える拠点を本学に整備し、キリスト教が成立したヨーロッパ中世の復興である礼拝堂とステンドグラスを公開することで中世キリスト教において成立した物質文化の根拠を確認する。それは同時に東北仙台の地域性を文化資源として開発することに寄与する。</p>				
②29年度の実施目標及び実施計画	<p>【目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① ラーハウザー記念東北学院礼拝堂のステンドグラスの修復、調査を行う。 ② 19世紀ステンドグラス関係の研究を継続し、平成29年度も英国で調査を実施する。 ③ 大学礼拝を市民に公開し、その中で音楽の役割を充実する。 ④ ホームページや活動報告パンフレット「水曜通信」などを通して広報活動を行い、本事業の成果を随時公表する。 <p>【実施計画】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 本事業の諸企画を市民に発信する。 ② ラーハウザー記念東北学院礼拝堂のステンドグラスを調査・修復し、その成果及び作業状況を一般市民に公開する。 ③ Heaton Butler & Bayne工房作ステンドグラスのなかでラーハウザー記念東北学院礼拝堂のステンドグラスを位置付けるための現地調査を行う。 ④ Katie Kresser准教授(アメリカ合衆国シアトル大学)、Gail Levin教授(ニューヨーク市立大学)、藤田治彦(大阪大学教授)を招へいしてのシンポジウム「ジョン・ラ・ファージ:ステンドグラス復興からジャポニズムへ」を開催する。 ⑤ Peter Lampe教授(ドイツ ハイデルベルク大学神学部)、辻学教授(広島大学大学院 総合科学研究科)を招へいして、講演会「我は福音を恥とせず — 新約聖書における〈福音〉理解 — (仮)」を開催する。 ⑥ 水曜日の夜の大学礼拝(水曜礼拝)の市民への公開をする。 ⑦ 平成28年度のシンポジウムの成果を刊行し、また仙台コミュニティ・ラジオと連携して本事業の成果を発信する。 ⑧ 研究基盤整備に必要な図書の購入を継続(Sources Chrétiennes, Corpus Christianorum series graecaなど)する。 				

③29年度の事業成果

- ① 東北学院大学ホームページ上で、ステンドグラスの修復調査の成果の公表およびそれに関する企画について告知した。
- ② 毎月一回開催される「水曜礼拝」において、「水曜通信」を配布し、本事業の進捗状況を報告した。
- ③ ラジオ番組「学院大ジンプンRadio」内で、平成30年1月から3月の水曜礼拝および「ステンドグラス再設置作業公開」、シンポジウム等の開催情報についての情報を発信した。
- ④ 平成29年度に公開講演会及びシンポジウムを開催した。また、一年を通して、公開講座・公開講演会等を共催するなどし、本学の建学の精神の根幹を成す「福音主義」の理解を一層深めることができた。
- ⑤ 神学研究推進部門の研究会を一回開催し、意見交換の機会となった。
- ⑥ 必要文献図書を整備し、購入を進めた。また、キリスト教研究のデータベースの購入も行い、今後の研究活動の推進に寄与することができた。
- ⑦ 平成29年度に出版した『東北学院の歴史』は、仙台・宮城県内の書店で販売され、卒業生のみならず地域住民に対しても、東北におけるキリスト教伝道の展開や、戦時期の苦悩など、本学のみならず宮城県・東北地方の通史的な理解を深める一助となった。

④29年度の自己点検・評価及び外部評価の結果

(自己点検・評価)
【全体】
ラーハウザー記念東北学院礼拝堂ステンドグラスの修復調査は概ね予定された日程に沿って完了させることができたと考えている。この修復調査に合わせて、作業開始時の平成29年8月3日と再設置時の平成29年2月27日に、その修復作業の状況を一般市民に公開し、また解説を行った。また、ステンドグラス修復調査の成果や状況は、本学のホームページ上などで随時に公表した。以上から、平成29年度のステンドグラス修復調査の実施計画は完了したと考えられる。

【神学研究推進部門】
平成29年度は昨年度に策定した実施目標と実施計画を予定通り遂行することはできたと考える。聖書が語る「福音とは何か」を平成29年10月のシンポジウムで深めることができ、平成29年9月の公開講座及び共催として関わった講座とフォーラムでは「福音主義とは何か」という歴史的視点から本学の建学の精神の意義を学ぶことができた。各講座も学内のみならず、学外からの参加者も多く、地域のなかで本学が果たすべき役割も再認識できたのは大きな成果といえよう。
しかし、シンポジウムなどの成果を書籍として平成29年度内に出版する予定であったが、諸般の事情からそれが見送られ、次年度に持ち越された。次回からは現実的に計画を立てた上で成果発表を行いたい。さらに、平成28年度に外部評価委員会から指摘された定期的な開催する予定であった研究会も一回しか開催できていなかったのは反省すべき点である。次年度は研究会を充実させるように努力をする。

【人文学研究推進部門】
ステンドグラス関係の研究調査に関しては、イギリスへの現地調査の計画を延期したものの、計画はおおむね予定通りに進められたと考えている。現地調査も平成30年度以降に実施される予定であり、計画全体において大きな支障は生じないと思われる。
人文学研究推進部門の研究体制については構成員、各課題内容、構造化、各年度の実実施計画などの点で整備を進めることができた。部門全体としては今後各構成員が研究を進めていく上での体制は整えられたと言える。
シンポジウム、公開講演会、その他のメディア発信は予定通りに実施された。すでに平成28年度の外部評価委員会でも指摘されていた点であるが、研究拠点整備という趣旨から見て、大学院生など若手を巻き込んだ研究事業を強化する必要があると考えたため、「ヨーロッパ近現代史若手研究会」の準備において連携することとなった。人文学研究推進部門のテーマや研究計画に留意しつつ、研究会を構成した。また、コミュニティラジオの番組は開始が当初予定よりも遅れたが、おおむね計画に沿った内容で放送された。

【地域研究推進部門】
地域研究推進部門においては、平成29年度の目標であった『東北学院の歴史』を刊行することができた。

(外部評価)
 平成30年3月15日(木)に外部評価委員会を開催した。
 委員会では、本学のブランディング事業に対する期待が寄せられ、全体的には、
 ①本年度の実施目標として掲げられた4項目のうち、その重要課題であった東北学院大学礼拝堂ステンドグラスの修復、調査が無事達成されたこと、および、同ステンドグラスが設置されている礼拝堂を核とした活動を積極的に発信し、東北学院大学の建学精神ならびにその特色を社会に周知していることは大いに評価できる。また、国内外の著名な研究者を招請して種々のシンポジウムや公開講演会を多く開催していることは本事業の学術的価値を大いに高めている。
 といった高い評価を得ることができた。その一方で、次のような指摘もあった。
 ②事業の3部門それぞれが多様な取り組みを積極的に行っていることは評価できるものの、部門間の相互乗り入れをした企画があってもよいように感じられた。たとえば、日本を含め、世界各地におけるキリスト教の土着化を追跡し、その史的意義を考究するような企画があれば、一層本事業の学術的価値は高まるように思われる。

この指摘については、本事業推進に係る事業計画委員会及び研究推進調整委員会において実施に向けた検討を行う。

⑤29年度の補助金の使用状況

【平成29年度事業経費】	○合計 20,592千円		
・設備備品費	172千円	・修繕費	11,136千円
・消耗品費	327千円	・賃借料	194千円
・図書費	987千円	・旅費(国内)	589千円
・委託費	1,040千円	・旅費(国外)	1,211千円
・通信運搬費	153千円	・人件費・謝金	3,707千円
・印刷製本費	1,004千円	・その他	72千円
【事業経費の管理体制】	・事業経費の使用に当たっては、本学の本事業推進に係る全体計画を策定する事業計画委員会において、事業計画に沿った適正な用途を確認している。		